

万葉の風物とその組合せに就いて

——卷八・卷十を中心として——

瀬 古 確

—

万葉集も卷八・卷十の二卷に於いて初めて四季による歌の分類が行われている。もとよりまだ春雑歌・春相聞と言った具合に雑歌とか相聞との絡み合いから完全には脱してはいないにしても、春とか夏とかの四季毎に歌を分類する事の採用せられている事は注目せらるべきであり、古今集に至って四季による分類の確立せられる素地を此処に準備しているが如くである。

しかもこれらの卷に見られる風物を見ると、既に特に人々によって好んで歌われる物が出現し始めているようである。

春のものとして、八・十の卷に特に多く詠まれているのは大略

霞 三一回

梅 二八回
鶯 二〇回

桜 一四回

柳 一三回

雪 八回

の如くである。此処では長歌は略し、旋頭歌は之を計算に加えてある。何れも春色を濃やかにするものばかりであるが、雪のように冬の第一位を占めるものの春にまで残っているものも見受けられるのである。梅は桜よりも上位にあり、当時の風流人に特に重んぜられたものの如くである。

梅は太宰府での梅花の宴の歌三十二首の如く、大群落もあって、舶載のものとして特に文人達の間愛好せられたものであった。まだ雪も降る冬の頃から梅は百花に魁けて咲き出すのであり、桜の山の桜と歌われる事が多

いに屢々里の梅・宿の梅などと歌われ、春の日を梅をかざして遊ぶ大宮人もあれば、酒坏にこの花を浮かべて、打興する人々もあったのである。

鶯は後世には春の言ぶれとして特に愛好せられたものであるが、既に万葉の当時から重んぜられており、梅と組合された作品も、いくつか見受けられるのであるが、その組合せのそれ程まだ固定化していなかった事は、梅は冬の間から雪に配せられ、春になっても、その傾向は猶存しているのである。しかし冬の間は雪が首位を占め、梅は之に続いているのであるが、春には梅が遙かに雪を引離して多く歌われるようになるのである。

桜は後の古今集時代には春の風物の第一位となり、花と言えば桜が代表となるまでに至ったのであるが、万葉の人々にも大いに重んぜられて、既に梅に迫る勢さを示しているのである。

即ち桜は

あしひきの山桜花日並べてかく咲きたらばいと恋ひ
めやも(巻八・一四二五、山部赤人)

の如く、その花期の短い事を歎かれるのは今も昔も全く同様であるが、

宿にある桜の花は今もかも松風疾み地に散るらむ

(巻八・一四五八、厚見王)

世間も常にあらねば宿にある桜の花の散れる頃かも
(巻八・一四五九、久米女郎)

の二首は相聞の作―後者は和歌―であるが、前者は風に散り易い桜の花に託して女郎の安否を尋ねたものであり、女郎は又その和歌においても「世間」―男女の仲に用いられる―の無常のためでしょうと、男の不信をなじるかの如くである。又

あしひきの山の間照らす桜花この春雨に散り行かむ
かも(巻十・一八六四)

の如く降るのも見えぬ春の雨にさえすぐ散ってしまうこの花を詠んだものもある。或いは

見渡せば春日の野辺に霞立ち咲きにはへるは桜花か
も(巻十・一八七二)

には霞と共に咲き盛っている春光あまねき春日の野辺を描いているものもあって、桜に寄せる時人の愛惜の情は甚だ深いのである。中国文化の摂取に余念のなかった万葉時代にとかく舶来の梅の花が喜ばれた中にあっても、桜も又梅に続いて重んぜられ、古今集以下の国風尊重時代に桜の特に愛好せられるに当っても、そのバトンタッチを容易にしているようにも思われるのである。

鶯は梅に続いて好んで詠ぜられているが、或いは雪に配せられたり(巻八・一四四二、大伴家持)霞と共に歌わ

れて

霞立つ野の辺の方に行きしかば鶯鳴きつ春になるらし
(巻八・一四四三、丹比真人乙曆)

の如く最も強く彼らに春を感じさせるものであった。

鶯の歌で私の心を引かれるのは

百済野の萩の古枝に春待つと居りし鶯鳴きにけむか

も(巻八・一四三二、山部赤人)

の一首である。この歌については観念的な歌として斥ける説(私注)もあるけれども、冬の野の萩の古枝にじつと春の来るのを待っているように声も立てずにとまっていた鶯の姿―それはあたかも春を待つ自らの心と通うものでもあるが―を深く心に留めておいた作者が春と共にその鳴声によって再生させたものである。ここにも私は春の歌四首(巻八・一四二四―一四二七)によって、菫・桜・梅・春菜の佳作をものした赤人の面目を示したものと考えるからである。

霞や柳・雪に就いては之を略して夏の風物に移りた
い。ここでは風物の特定のものに集中するのを論じてい
るので、志貴皇子の懽の歌(巻八・一四一八)に見える早
蕨などについては言及しない事にした。

夏の風物では一層その範囲が狭くなり、人々に愛好せ
られるものが更に固定化するようになってい。即ち卷

八・卷十の二卷にあつては凡そ

霍公鳥 五一回

橘 二一回

卯の花 一三回

雨 五回

月 四回

のように殆んど霍公鳥を中心として之に配せられるものに集中しているようである。霍公鳥は特に家持などによって橘と組合せた作がいくつも作られており、その結合の強固さを物語っているのであるが、ここでは卯の花とか時には雨とか月とか―これは後世のほととぎすの歌にも見られる著しい特色であるが、既に万葉集に^{注1}あつても風物の集中化・固定化の漸く行われ始めている事を示すものとして注目せられねばならないであろう。

中でも霍公鳥は最も愛好せられ、坂上郎女のように、京師に帰ってからも、太宰府で官邸の裏山で鳴いたこの鳥(巻八・一四七四)を懐しんだり、更に

霍公鳥いたくな鳴きそひとり居て寝の寝らえぬに聞
けば苦しも(巻八・一四八四、坂上郎女)

のように、霍公鳥の鋭い鳴声によって物思いに寝られな
い自分を一層苦しませる事を詠んでもおり、文人趣味を
身に付けた女流歌人の一面を物語っている。

又霍公鳥の橋に配せられている事は家持に就いて既に述べたが、

わが背子が宿の橋花をよみ鳴く霍公鳥見にそ我が来し (巻八・一四八三、奄君諸立)

わが宿の花橋を霍公鳥来鳴かず地に散らしなむとわ (巻八・一四八六、大伴家持)

わが宿の花橋を霍公鳥来鳴きとよめて本に散らしつ (巻八・一四九三、大伴村上)

霍公鳥花橋の枝にゐて鳴きとよもせば花は散りつつ (巻十・一九五〇)

霍公鳥来居も鳴かぬわが宿の花橋の地に落ちむ見む (巻十・一九五四)

などの如く好んで歌われているのであるが、又一方では卵の花とか菖蒲なども組合せられているのを見れば、まだその結合は固定化してはいないようである。

月や雨も霍公鳥と共に配せられる事は後世にあっては屢くであるが、万葉集にあつても既にその先觸を見出だす事ができるのである。

更に霍公鳥はその初声が喜ばれたり、遅く鳴くのを怨む歌まである事は家持の作品に著しいのである。彼の文人趣味を示すものと言ふべきである。

霍公鳥は更に季節を知る鳥として枕草子などの著者に

よつて推賞せられて^{注2}いるのであるが、万葉人も既に

霍公鳥声聞く小野の秋風に萩咲きぬれや声の乏しき (巻八・一四六八、小治田広瀬王)

の如く、この鳥の秋風が吹き萩の花の咲くようになること鳴く事も稀になると言つた点を認めているのである。

夏の風物は春のものに較べて、甚だ狭少となっているのであるが、既に霍公鳥がその首位を占め、勅撰集を通じて^{注3}も些かも変る事のないのは注目せらるべきである。

風物の範囲の狭くなると共に、霍公鳥への集中化の傾向も著くなつたようである。

春や秋の風物の多種多様であるのと著しく対比的である。

二

転じて八・十の両巻の秋の風物を見ると大略

萩 一一二回

黄葉 七七回

白露(露) 四六回

雁がね 三八回

さを牝鹿 三七回

時雨 三四回

秋風 三二回

月 二二回

秋田(稻) 一六回

の如く種類の多いばかりでなく集中的に歌われるものも幾つも見受けられるのである。この点は夏や冬と著しい相違である。

古今集にあつて春と秋とが二巻を占めているのに、夏と冬とのただ一卷に過ぎないのも、万葉の伝統に棹さすものと言ふべきである。

後世特に後拾遺集以後、花・郭公・月・雪の系譜が成立してゆるぐ事がなく、月が王座からすべて了うのは漸く新古今集に至つて初めてである。西行や芭蕉なども古人の歌い残した所を吟じたとは言つても、猶この系譜から抜け出す事はできなかったのである。^{注4}

各季の代表が固定するまでには長い年月が必要であつたのであるが、既に万葉集に於いても、夏と冬の代表的な風物は早くも固定化してしまつてゐるのは注目し得る事実である。

月が秋の風物の代表となり、花・郭公・月・雪の系譜の完成するのは漸く後拾遺集以後の事であるが、卷八・卷十の月の位置を見ても、萩や黄葉には遙かに及ばないのはもとより、同じ天象部の中でも、露や時雨や秋風に

さえ及ばないのも、秋の代表に対する人々の評価の決定せられるまでには長い推移のあつた事も確かである。

表の最後に掲げた秋田(稻)は、万葉の都人士のまだ田園とかかわりの深かつた事を物語るものであるが、坂上郎女なども屢々田庄に赴いているのも、当時の上流婦人さえ甚だ田園的であつた事を物語るものであろう。

扱秋の風物の第一位は萩であるが、

秋萩は咲くべくあるらしわが屋戸の浅茅の花の散り行く見れば(卷八・一五二四、穂積皇子)

の如く萩の咲くのを待つ作もあれば、萩の初花を喜ぶ歌(一五四六、旅人)もある。

草枕旅行く人も行き触ればにほひぬへくも咲ける萩かも(卷八・一五三三、笠金村)

の如く一寸行きずりにさわつても衣にもおうばかりに咲き満ちているこの花を喜ぶものもある。

恐らく作者の旅での実感であらう。或いは

わが丘にさを牝鹿来鳴く秋萩の花妻問ひに来鳴くさを牝鹿(卷八・一五四一、大伴旅人)

の如く鹿に配して歌つたものも少くない。

秋萩の散りのまがひに呼び立てて鳴くなる鹿の声の通けさ(卷八・一五五〇、湯原王)

さを牝鹿の胸別にかも秋萩の散り過ぎにける盛かも

いぬる(巻八・一五九九、大伴家持)

宇陀の野の秋萩しのぎ鳴く鹿の妻に恋ふらく我には

益さじ(巻八・一六〇九、丹比真人)

さを牝鹿の妻ととのふと鳴く声の至らむ極み靡け萩

原(巻十・二四二)

秋萩の散り行く見ればおほほしみ妻恋すらしさを牝

鹿鳴くも(巻十・二五〇)

などの如きは、何れも萩と鹿とを組合せたものであり、萩の本によく鹿のいるのを見て、萩を鹿の花妻と見立た事によるものである。

萩と鹿とを―特に萩を鹿の花妻と見立てて組合せたの

は面白いのであるが、萩との組合せは

萩と露 三二回

萩と鹿 一八回

萩と秋風 一二回

萩と黄葉 八回

萩と雁 四回

萩と時雨 四回

などの如く鹿との組合せ以上に露と配せられたものが遙かに多く、秋風・黄葉・雁・時雨などと共に歌われる事も少くないのである。

これらの風物の何れも秋のものとして時人に愛好せら

れた事は前掲の風物の度数表によっても窺われる所である。

これによっても多くの風物の集散的に歌われる春とか秋に、風物の組合せが多様であり、歌われる季のもの少い夏とか冬にあっては組合せられる風物も固定化してしまっているようである。

歌われる風物の多い春とか秋の場合には、季の代表の決定せられ、固定化せられる事も容易ではなく、長い年月を要したのであるが、詠まれるものの少い夏とか冬にあっては、その季の代表の固定せられる事も比較的早く行われたものである。

従って風物の組合せに当たっても、夏や冬にあっては固定化の傾向が著しく、春や秋にあっては代表的な組合せばかりでなく、色々な組合せが認められるのである。

所で萩に続いて好んで詠まれた黄葉について見ると、

経もなく緯も定めずをとめらが織る黄葉に霜な降り

そね(巻八・一五二二、大津皇子)

などの如く黄葉を美しい織物に比したのもあり、ここでは黄葉は霜と共に歌われている。

もとより霜は黄葉を散らすものとしてその到来を拒否せられているのである。組合せと言っても必ずしもその風趣を深めるために利用せられるものばかりではなく、

ここでは好ましくないものを斥ける事によって、好ましいものを少しでも長く眺めようと願っているのである。

時待ちて降りし時雨の雨やみぬ明けむ朝の山のもみ

たむ(巻八・一五五一、市原王)

時雨の雨間なくし降れば三笠山木末あまねく色づきにけり(巻八・一五五三、大伴福公)

雨隠り心いぶせみ出で見れば春日の山は色づきにけり(巻八・一五六八、大伴家持)

などの如く、時雨の雨は山々を黄葉させるものとして詠まれており、前の霜とは正反対の関係に立っている。しかし時雨も長く降続くと黄葉を散らすものとして

奈良山の峯のみち葉取れば散るしぐれの雨し間なく降るらし(巻八・一五八五、泉大養吉男)

朝露にほひ始めたる秋山に時雨な降りそあり渡るがね(巻十一・二二七九)

などの如くも歌われている。後の歌に見える朝露もこの作では山の木の葉を黄葉させるものとせられているが、時には散らす結果となる場合もある事は全く時雨と同様である。

桜と春雨の場合にも春雨は花を咲かせるものとして、又時には花を散らすものとして詠まれているのも、秋の黄葉と時雨の関係によく似ているようである。

即ち彼らの好みの風物に配せられたものは時により或いは喜ばれ、或いは疎んぜられる結果となる運命に立たされている。

次に萩との組合せの最も多い露は八・十の両巻にあっては萩・黄葉に続いて好んで歌われている。中には

さを牝鹿の萩に貫きおける露の白玉あふさわに誰の人かも手に巻かむちふ(巻八・一五四七、藤原八束)

の如く萩と鹿とに配せられて、萩の枝を貫くようにおいてあるのは鹿の為業としているものさえある程である。白玉のような美しい露は萩の花と共に一入その美しさを發揮するかのようである。

露は又消えやすいので

秋づけば尾花が上におく露の消ぬべくも吾は思ほゆるかも(巻八・一五六四、日置長枝娘)

のように好んで「消ぬべく」に続く序中に用いられる事が多いのである。

わが宿の尾花が上の白露を消たずて玉に貫くものにもが(巻八・一五七二、大伴家持)

の如く白露の美しさを長く留めようと願うものさえあって漸く優美なもの繊細なもの喜ばれる流風の強まりつつあるのを認めずにはおられないのである。

露は又

この夕秋風吹きぬ白露に争ふ萩の明日咲かむ見む

(卷十・二二〇二)

の如く萩の咲くのを促すものとしても、或いは

白露のおかまく惜しみ秋萩を折りのみ折りておきや枯

らさむ(卷十・二〇九九)

の如く散らす方の作用をするものとしても詠まれており、桜と雨、黄葉と時雨などの場合と全く同様である。

露の美しさは萩に配せられて、特に發揮せられているようである。

秋の第四位の雁は

九月のその始雁の使にも思ふ心は聞えここぬかも

(卷八・一六一四、桜井王)

の如く初雁に思ふ人からのたよりを期待すると言った文人趣味も歌われているが、雁と組合せられているのは、雲が一番多いのはこの鳥の飛ぶ姿を歌うためである。又萩や黄葉・秋風に配せられたもののいくつも見られるのも秋の風物としてこれらのものが多く詠まれている所からも当然の事であろう。

ついで鹿は萩や露に配せられる事が多く、萩の屢々鹿の花妻として興ぜられている事も既に述べたが、ここには春の梅に鶯と共に、風物の組合せにも固定化の傾向の漸く動き始めた事を物語るものである。

時雨は黄葉を促したり、之を散らすものとして、プラスとマイナスの作用をする事は既に述べた所であるが、時雨は又黄葉に配せられる事が最も多く、秋風・雁・萩・月などとも共に歌われる事もある。

同じ組合せが何度も行われているのは、それらの風物の結び付きの固い事を示すものと言ふべきである。

次に秋風は額田王と鏡王女との次の歌などに巧みに利用せられていて特に有名である。

君待つとわが恋ひをればわが屋戸の簾動かし秋の風
吹く(卷八・一六〇九、額田王)

風をだに恋ふるはともし風をだに來むとし待たば何
か嘆かむ(卷八・一六〇七、鏡王女)

などの二首にあつて、前者は全身をアンテナにして、待つ人の來訪を望んでいるのに、待人は来るけはいもなく、ただ秋の風がカサコンと簾を動かしながら淋しく通り抜けて行くのを詠んだもので、彼女の心にぽっかりとあいた大きな淋しさの空洞を露呈しているようである。

後者は之に和したもので、風をでも待てるのはまだ幸せと、全く待つ事をさえ忘れてしまった自らを嘆いているのである。

秋風によって巧みに兩者の身の上を歌いわけられた佳品である。

風は萩と組合せられる事が最も多く、雁や露に配せられる場合もあるが、何れもその組合せの熟していないのを見逃しえないであろう。

次に月は八・十の両巻にあっては、八位にとどまり、秋の王座に躍進して、その地位をゆるぎないものとするには、程遠い事をよく示している。

露やこほろぎに配せられているものもあるが、その結び付きは確かでない。

秋田とか稲とかも八・十の両巻には何度も歌われており、坂上郎女などの何度も田庄に赴いているのと共に、当時の貴族もまだ田園との繋がりの濃やかであった事を示すものであろう。

秋田は雁や月とか霜に配せられる事もあるが、密着性は乏しいようである。

転じて冬の景物としては、雪と梅とが共に最も多く詠まれ、雪は三三回梅は一八回を数えられるが、他は月・雲・霰などがわずかに詠まれているに過ぎない。

当然の事として組合せられるものも雪と梅に殆んど限られる事となり、梅と月とによって

ひさかたの月夜を清み梅の花心開けてわが思へる君

(巻八・一六六一、紀少鹿女郎)

わが宿に咲きたる梅を月夜よみ夕見せむ君をこそ

待て(巻十・三三四九)

などの如く相間的発想に利用しているなどは稀な例とすべきである。

風物の少ししか見られない季節にあっては、組合せるものも著しく限定せられているのである。

春や秋に多くの風物が詠まれ、組合せも多様であったのと対比的である。

三

以上巻八・巻十の四季による分類の行われた卷々の風物を眺めて、その或るものへの集中化の傾向の既に動きかけている事を考察した。

春のものとしては霞をはじめとして梅・鶯・桜・柳などが特に重んぜられている。まだ勅撰集に見られるように、桜がその王座を占めるまでには至っていないけれども、既に桜も梅に迫る勢を見せているのは注目せらるべきであらう。

夏のものとしては霍公鳥・橘・卯の花などが集中的に詠まれ、雨や月が幾らか歌われているに過ぎない。ここでは全く花・郭公・月・雪の系譜の成立を準備して待っているように見えるのである。

秋のものは甚だ豊富であり、萩がトップで群を抜き、

黄葉・露・雁・鹿・時雨・秋風と続き、後に秋の王座を占める月は漸くその次に現れているに過ぎないのである。

秋の風物の一つのものに代表せられるためには勅撰集も第四の後拾遺集以後の事である。

即ち同じ天象部だけで之を見ても、月は古今集では風や露に及ばず、後撰集でも露・風に続いて第三位に立ち、拾遺集になって初めて風に続いてやつと第二位となり、次の後拾遺集にあつて首位になる準備を整えるに至つたのである。花・郭公・月・雪の風流の系譜の成立には長い年月の経過を必要としたのである。

歌われる風物の多い秋に、特に二つのものを組合せてその趣を深めようとするのも当然であり、第一位の萩との組合せを見ても、(1)萩と露(2)萩と鹿(3)萩と秋風(4)萩と黄葉(5)萩と雁(6)萩と時雨などの組合せが何度も見受けられるのである。

中でも萩と鹿の如きは春に於ける梅と鶯の組合せと共に、更に夏の霍公鳥と橘との組合せも加え最も典型的なものとして特に人々に好まれたようである。

梅にしても雪との組合せも見られ、これは冬の間から既に配せられたものであつて、冬からの引続きとも見られるのであり、春の風物の組合せとしてその趣を深めるものとしては遠く梅と鶯との組合せに及ばないのであ

る。

萩にしても鹿との組合せよりも露との組合せの方が遙かに多いのであるが、露は萩に対しては花の咲くのを促す方としてと、花を散らす結果となる方との両面を持つており、萩と鹿との配置の共に秋色を深めて、自ら一幅の絵を構成しているのに及ばない事はもとよりである。

桜と春雨、黄葉と時雨なども秋の白露と同じような作用をしており、共に萩と鹿の組合せに対比せらるべくもないのである。

又冬の風物としては雪と梅に集中しており、既に雪は冬の風物の代表の位置を占めており、永く勅撰集にも継承せられて行っている事は前に述べた通りである。

組合せに於いても、冬の歌には雪と梅の一組しかないのであるが、四季を通して組合せの最も固定化したものとして注意される所である。

風物の固定化も風物の少い夏や冬に著しく、郭公と雪とは既に万葉人によって風流の系譜への参加が行われていると言つても過言ではないのである。春のものとしては霞・梅・桜とまだ固定せずにいるが、近く古今集に於いて、花と言えば桜を思わせるほどになる素地は既に梅・桜と続いて多くの歌を詠んでいる万葉人によって形造られているのである。

秋のものとしての月の首座を占めるに至るのは後拾遺集に於いてであり、古今集・後撰集・拾遺集にあっては、月以外のものが首位を占めているのに見ても、巻八・巻十の両巻にあって、月の第七位である事も、その間の事情を暗示しているようである。

次に三つの風物の一首の中に詠み込まれたものを眺めてみる事にしたい。

三つの風物の組合せも特に時人に好んで詠まれたものも多く、中には例えばAとB、BとCのように既に二つの組合せの多く見受けられるものが合体してA・B・Cの組合せとなったようなものさえ幾つもある。二つのものによく組合せられている場合に、もう一つの物の加えられる事はもとよりである。

(1)わがさしし柳の絲を吹き乱る風にか妹が梅の散るらむ (巻十・一八五六)

(2)梅が枝に鳴きて移ろふ鶯の羽白妙に沫雪を降る (巻十・一八四〇)

(3)春霞流るるなへに青柳の枝くひ持ちて鶯鳴くも (巻十・一八二二)

(4)雪見れば未だ冬なりしかすがに春霞立ち梅は散りつつ (巻十・一八六二)

(5)風まじり雪は降るとも実にならぬ吾家の梅を花に散

らすな (巻八・一五四五、坂上郎女)

などの如く、鶯とか梅と組合せたものが特に多いのも梅や鶯が重んぜられたためであろう。

(1)は柳・風・梅を配したものであるが、そこには柳と風の組合せの見られる例えば

青柳の絲のくはしき春風に乱れぬ先に見せむ子もかも (巻十・一八五一)

の如き歌の二つの風物に、梅を加えたものであり、(2)は梅に鶯、梅に雪の組合せの数多く見られるのによれば、この両者を一組とした歌の現れるのも不思議ではない。梅に鶯、更にその上に沫雪を配した所に、自ら早春の風光を絵画的に美しく描いた作となっているのである。

(3)は霞・青柳・鶯の組合せであるが、鶯と霞との組合せは他(一八四五)にもあり、又

(6)白雪の常しく冬は過ぎにけらしも春霞たなびく野辺の如くも歌われていて、(6)の雪の全く冬のものとして対比的に置かれているのと違って、青柳を加える事によつて一入春色を深める効果を發揮しているようである。

又(4)は霞に梅の組合せを雪に配したもので(6)の場合とよく似た手法であり、三つの組合せにまで類想の生れつつあるのを知る事ができる。

(5)は梅の歌によく用いられた梅と雪との組合せと

峯の上に零りおける雪し風のむたここに散るらし春に
はあれども(巻十・一八三八)

の歌に見える風と雪との組合せを一つにしたものとも言えるであらう。ここでも雪は冬のものとして春にもまだ残る風物である事に交りはない。

このように三つ組合せられたものには特に人々に喜ばれた梅とか鶯に關係するものが多いのも当然と言えるであらう。

しかも中には

鶯の木伝ふ梅のうつろへば桜の花の時片設けぬ(巻十・一八五四)

の如く梅と鶯の組合せばかりでなく、梅の花から桜の花へと推移して行く春の深まりを巧みに描いたものもある。

夏の風物のうち三つの物を一首のうちに歌っているのは次の六例であるが、

(7)卵の花の過ぎば惜しみか霍公鳥雨間もおかず此ゆ鳴
き渡る(巻八・一四九一、大伴家持)

(8)霍公鳥鳴く声聞くや卵の花の咲き散る岡に田葛引く
少女(巻十・一九四二)

(9)月夜よみ鳴く霍公鳥見まく欲りわれ草取れり見む人

もがも(巻十・一九四三)

(10)朝霧の八重山越えて霍公鳥卵の花辺から鳴きて越え
来ぬ(巻十・一九四五)

(11)かくばかり雨の零らくに霍公鳥卵の花山に猶か鳴く
らむ(巻十・一九六三)

(12)霍公鳥鳴きぬる小野の秋風に萩咲きぬれや声の乏し
き(巻八・一四六八、小治田広瀬王)

などの如く何れも霍公鳥を中心としたものばかりであるのは如何にこの鳥が夏の代表としての地位を確固たるものにしてゐるかを物語っているかのようである。

(7)は霍公鳥と卵の花、霍公鳥と雨間との二つの組合のよく見られるのを、一つに圧縮したようなもので霍公鳥の鳴き立てる一つの場面を巧みに浮かび上らせている。

(8)は又霍公鳥と卵の花との組合せに田葛を加える事によつて少女に呼びかけたものであるが、(9)は霍公鳥と月との組合せに草(田葛を指す)を点ずる事によつて(8)の歌に和したものである。「人」の对手を指している事はもとよりである。

(10)も霍公鳥と卵の花の組合せに朝霧を配し、朝霧の中を山々を越えて鳴いて飛んで行く霍公鳥を浮彫にしている。

(11)は霍公鳥と雨、霍公鳥と卵の花の二つの組合せを一

つにしたもので、雨の中までせかせかと鳴き立てる霍公鳥の姿をよく把えている。

(12)は前にも引用した事があるが、夏のものとしての霍公鳥に秋のものとしての秋風と萩とを置いたもので、この鳥の夏を過ぎるとぼったり鳴かなくなってしまう点をよく歌い上げている。秋風や萩が出されても霍公鳥が中心となつているので夏雑歌に入れられているのである。

歌われる風物の少い夏の歌にその代表的な霍公鳥を中心としていつも三つの風物が配せられているのも当然の事と考えられるのである。

転じて秋の風物の三つ詠み込まれたものを見るに、夏に較べると遥かに多様である。好んで詠まれる風物の多い秋にあつては当然の事であるが、ここでも好んで二つ組合せられた風物を含んでいる場合が殆んどである。三つのものの歌われる場合にも、人々の好みのもの一特に何度も組合せの見られた一の土台となるのは自然だからである。

三つの組合せに於いても

(13)さを牝鹿の萩に貫きおける露の白玉あふさわに誰の人かも手に巻かむちふ(巻八・一五四七、藤原八束)

(14)さを牝鹿の来立ち鳴く野の秋萩は露霜負ひて散りにしものを(巻八・一五八〇、文忌寸鳥養)

の如く鹿・萩・露―後者は露霜。一の三つの組合せがよく似ており、ここでは鹿と萩、萩と露との二つの組合せを約めて三つとしているのである。更に

(15)この夕秋風吹きぬ白露に争ふ萩の明日咲かむ見む(巻十・二〇二)

(16)この頃の秋風寒し萩の花散らす白露置きにけらしも(巻十・二七五)

などの如く、秋風・白露・萩の三者を組合せたものも現れており、前者の秋風と白露は萩の開花を促す趣のあるのに、後者にあつては秋風も露も共に花を散らすものとして描かれている。萩の花の咲くのを喜び散るのを嘆く作者の心が秋風や露によって強められている事は確かである。

或いは秋風・露・萩の秋風の代りに雨を置いて

(17)白露に争ひかねて咲ける萩散らば惜しけむ雨な降りそね(巻十二・二二六)

の如く露・萩・雨を配したものもあるが、ここでは白露は萩の開花を促し、雨はその花を散らすものとしての役目を果しており、(15)(16)を圧縮したような趣を示している。

或いは秋風・露・萩の組合せの露の代りに葛を配した(18)ま葛原なびく秋風吹く毎に阿太の大野の萩の花散る

(卷十二・二〇九六)

の如く葛・秋風・萩を配したのもあり、類似の組合せが目立つのも、単独にも好んで詠まれたものが並べられているためである。特に二つ組合せて多く歌われたものがその中に入っているものが多い事も、彼らの好みのもので集められた事を有力に物語っている。彼らの心を引くものの特に多かった秋の風物の組合せにこれらのものの登場するのは当然と言えるであろう。

その他の三つのもを配した歌にも

(19)雲の上に鳴きつる雁の寒きなへ萩の下葉はもみちぬ
るかも (卷八・一五七五、作者不明)

(20)さを牝鹿の心相思ふ秋萩の時雨の零るに散らくし惜
しも (卷十・二〇九四)

(21)十月時雨にあへるもみち葉の吹かば散りなむ風のみ
にまに (卷八・一五九〇、大伴池主)

(22)雁は来ぬ萩は散りぬとさを牝鹿の鳴くなる声もうら
ぶれにけり (卷十・二二四四)

(23)露霜の寒き夕の秋風にもみちにけりも妻梨の木は
(卷十・二二八九)

(24)さ夜更けて時雨な降りそ秋萩の木の葉の黄葉散らま
く惜しも (卷十・二二二五)

などの如く(19)は雲・雁・萩のもみち(20)は鹿・萩・時雨(21)

は時雨・黄葉・風(22)は雁・萩・鹿(23)は露霜・秋風・梨のもみち(24)は時雨・萩・黄葉と言った風にその各々に二つがよく組合せられるものが多いのである。

更に他にも三四の三つの風物の組合せも見られるのであるが、その何れも二つのものの組合せて歌われているもの、少くとも秋の風物として人々に好んで歌われるものを一つも含んでいないものはない程である。

ここにも三つのものの配せられるに当たっても二つのものの組合せを土台としている場合の多い事を看取するに難くないであろう。

相聞の歌には各季の歌を通して、二つの風物を組合せたものも少く、まして三つの風物を並べたものは稀であるが、秋相聞には

(25)わが宿の萩の下葉は秋風も未だ吹かねばかくそもみ
てる (卷八・一六二八、大伴家持)

(26)草深み蟋蟀多に鳴く屋前の萩見に君は何時か来まさ
む (卷十・二二七二)

などの如く二例を見る事が出来る。

(26)の方は草と蟋蟀と萩とを挙げて君の来訪を促したものであるから、相聞の意は風物と共に一草は余り役に立たないにしても、やはり蟋蟀を出す役目をここでは果している一充分表現し尽している。

しかし前者の(25)では萩に秋風と黄葉―萩の黄葉であるが―を配しただけで一見雑歌と何ら変りはないようにも見える。しかしこの歌は家持の作であり、左注によれば天平十二年夏六月にもう一首の

わが屋前の時じき藤のめづらしく今も見てしか妹が
咲容を(巻八・一六二八)

と共に坂上大嬢に贈ったもので、題詞にも、

大伴宿禰家持の時じき藤の花と萩の黄葉との二物を
攀ぢて坂上大嬢に贈る歌二首

と記されている。

即ち(25)の歌は一六二八の歌の後に記されており、再び「今も見てしか」などと繰返す必要はないので、その贈物の一つである夏六月としては珍らしい萩の初花を歌いさえすればよいのである。こんな訳で(26)が三つの風物を容易に歌い上げているのである。

詠むべき風物の多い秋の歌に、二つの組合せの種々見受けられるばかりでなく、三つのものの組合せにまで同じ型のもの―又はそれに類似のものが見られるのも、不思議ではないのである。

夏や冬のものよりも、春のものまで古今集以降にあつては桜(花)に固定してしまつてゐる―万葉では桜よりも梅の重んぜられた事は既述の通り―のに反して、

秋のものだけいつまでも定まらなかつたのも、秋には詠むべきものが多く、あれもこれもと定めにくかつたためである。

額田王によつて春にも心を寄せながら、結局秋の方に賛意を表せさせたのも時人^{注6}の秋への深い愛惜の心を代弁させたものにほかならないであらう。

冬の風物の多くは雪と梅に限られており、二つの組合せも雪に梅を配したものが幾組もある程である。三つの風物を一首に配したのものとしてはわずかに次の二組を見出だすばかりである。

(27)梅の花枝にか散ると見るまでに風に乱れて雪ぞ降り

くる(巻八・一六四七、忌部首黒塵)

(28)松蔭の浅茅が上の白雪を消たずて置かむことはかも
無き(巻八・一六五四、坂上郎女)

などがそれであり、二首共に雪を中心にしており、(27)の歌は梅・風・雪を配したもので作者の春を待つ心が雪の降るのを梅の花の散つてゐるのではないかと思わせているのである。

(29)は又松・浅茅・白雪の三つを組合せて、色彩的な對比を試みているばかりでなく、雪にさえも愛惜の心を示すようになつてゐるのである。共に当時の文人趣味の窺われる作と言ふべきであらう。

更に四つの風物を一首の中に詠み込んだものも次の二首を挙げる事ができる。即ち

(29) 秋の野に咲ける秋萩秋風になびける上に秋の露置け

り(巻八・一五九七、大伴家持)

(30) 卷向の檜原もいまだ雲るねば小松の上ゆ沫雪流る

(巻十・二二三四)

などがそれであるが、(29)には家持の打興した様が窺えるに過ぎないであろう。秋の野・秋萩・秋風・秋の露とわざわざ凡てに秋を冠らせた所にも、彼の即興的な作品である事を物語っている。しかしそこには秋と露と言った当時の人々に好んで用いられた組合せの土台にせられてゐる所に、風流に生きた家持の面目を窺わせるに足るものがある。

(30)は冬のを四つも詠み込んだもので、八・十の兩卷共に冬の歌には三つを詠んだものも一首もないのを思う時、珍らしい作品と言うべきである。しかも家持の作の、歌われる風物の多い秋の歌であるのに、この歌はとかく歌われる物の限られてしまつてゐる冬の作であるのを考えれば、その風物把握の力の巧みであるのはもとより、その雪景色を眼前に思い浮ばせるに足る力量にはただ驚くほかはないのである。

猶憶良の作には、秋の七種を尽く一首の中に並べた作

(巻八・一五三八)もあつて周知の通りであるが、萩の花を最初に挙げて、それとなく時人のこの花に寄せる心の最も著しい事に賛意を表しているほかは何の趣もないものとなつてゐる。短い形式の短歌や旋頭歌に多くの風物を盛るには、限度のある事を示す作品として私には特に興味のある所である。

万葉集の風物もとかく春と秋とに多く、一春よりも秋の方が遥かに豊富であるが一八と十との兩卷の四季の風物の中にも、徐々にその代表的な物が現れて来ており、夏や冬では後世と全く同じように、郭公や雪が首位を占めるに至つてゐるのであり、春の梅のこれに迫る桜と交代する運命も余り遠くない事を思わせるものがある。

秋の月に至つては、最も遅く秋の代表となるものであるが、八や十の巻でも、萩や黄葉には遠く及ばないのである。これは勅撰集に於ける花・郭公・月・雪の系譜の歴史を縮図として既に暗示してゐるかの如くである。

又風物の組合せも種々見受けられ、中には梅に鶯、霍公鳥に橘、萩に鹿、雪に梅の如くその組合せの型までも生まれかかつてゐるのを知る事ができる。

又一首に詠み込まれる風物にも、ある程度の制限があり、三つの場合までが多く行われ、中には四つを並べても成功したのも稀にはあるけれども、即興の作に限ら

れている。ここにも短詩形の作品の運命があるようである。

雑歌に較べて相聞の作には主想が別にあるので、風物の撰取にも著しい制限がある。相聞の作の組合せに二つのものが多く、三つ以上のは殆んど一家持の作に三つの風物の見られるものもあるが、二首の中の一首であるために、たまたま余裕に恵まれたためで、例外とすべきである—ないのも当然と言うべきであろう。

此処では卷八・卷十の風物をめぐって風物の集中化とか固定化の問題、好んで組合せられた風物などについて少しくその実態を勃撰集などと関連して述べたものである。

注1 拙著「大伴家持の研究」(白帝社)所収、「歌人としての家持」中の動物の表並に「日本文学の自然観照」所

収の「歌合の自然観照と勃撰集との交渉」などを参照。

注2 拙著「日本文学の自然観照」(右文書院)所収の「枕

草子の自然観照」参照。

注3 拙著「日本文学の自然観照」所収の第二表、夏の部の

風物表(一〇〇頁)参照。

注4 拙著「日本文学の自然観照」所収の「西行の自然観

照」並に「芭蕉の自然観照」を参照。

注5 拙著「日本文学の自然観照」所収第三表、秋の部の風

物表(一一〇頁)参照。

注6 拙著「万葉集の表現」(教育出版センター)所収「額

田王の表現」並びに重松信弘博士頌寿会編、「源氏物語の探究」(風間書房)所収の拙稿「源氏物語の春秋

優劣論をめぐって」—万葉集との対比に於いて—等を

参照。